



説教要旨 「次の世に備えて」

ルカによる福音書 20章27～40節



ここに登場するサドカイ派に属する人々は、多くが神殿を中心とする働きをしており、ユダヤ教ではいわゆる特権階級にある人々でした。彼らは死者の復活や、目に見えない天使や霊の存在も否定するという、合理的で現実的な信仰者でした。サドカイ派が復活を否定したのは、今生きている現実になんか満足していたからだと言えます。特権階級にあった彼らにとってこの世を生きることはそれほど不満がなかったのです。ローマに支配されてはいるけれども、自分たちはさほど不自由なく暮らせているし、来世に希望を置かなければならないほど追い詰められていたわけではない、そんな人々です。

彼らが復活を信じるものをあざ笑うための鉄板のネタが、ここで語られている七人兄弟のたとえ話でした。七人兄弟の長男が妻を迎えたが子がないまま死んだので、モーセの言葉にならって、次男が兄嫁と結婚します。しかし次男も子がないままに死に、次々と同じことが起きて、ついに七人の兄弟全員が、兄嫁と結婚することになり、最後はその兄嫁も死んでしまいます。「こうした場合、復活したら死んだ女は誰の妻になるのか」と嫌らしく問うたのです。

理性ではつかめない死者の復活を否定するサドカイ派の物の見方は、現代社会に生きる私たちにも通じる所があります。死者の復活など、いくら言葉で説明しても、理解してもらえないどころか、世間から奇異の目で見られてしまうでしょう。それどころか私たち自身、復活など本当にあるのだろうかとかどこかで疑ってしまいます。

私たちの生涯には、口では言い尽くせないほどの労苦や挫折、恥や憤りがあります。とうてい喜びや楽しみとの帳尻が合っていないように思えます。しかし、死の中からイエス・キリストを復活させられた神様は、労苦や挫折、恥や憤りなどを抱えて生きる私たちを、空しいままで終わらせるようなことはなさらないのです。どんなに空しいように思える苦しみであっても、それを復活のイエス様と出会う糧とし、イエス様と共に生きていく中で、大きな恵みへと変えてくださるのです。